

第六一號昭和卅六年九月十五日發行
每月十五日一回發行 一部 十円
昭和卅二年十月十八日 第三種郵便物認可

水拓

九 月



兵庫県漁業協同組合連合会
財団法人 兵庫県水産業改良普及協会

沿岸漁業の構造改善について(一)

―兵庫県内海地域が調査地域に指定―

最近、「沿岸漁業の構造改善」という言葉を、ラジオ新聞又はいろいろな会合などでよく耳にされたり、読まれたことと思います。又、ご承知の方もおられると思いますが、国では、本年度に十三の地域を指定して「沿岸漁業構造改善促進対策事業」の名のもとに、二カ年の調査を経て、昭和三十八年度から(一部昭和三十七年度から)沿岸漁業構造改善のための事業を行なうことになり、幸い兵庫県内海地域は、去る八月、十三地域の一つとして指定を受けました。

この「沿岸漁業の構造改善」は、これからの水産行政の根本施策となる重要な問題でありますので、拓水の紙上を通じ、そのあらましなり要点をご紹介したいと思います。

◎構造改善とはどういふことか

皆さん方もご承知のとおり、わが

国の経済は世界の奇蹟といわれるほど高い成長を続け(第一表参照)既に戦前の水準を遙かにこえ、「所得倍増」という嬉しいスローガンのもとに、国民は明かるい希望をもつようになりました。

戦後成長率の国際比較(第1表)

国名	成長率
ドイツ	8.4%
日本	8.2
オーストリア	7.9
フランス	5.8
イタリア	5.5
イスラエル	3.9
アメリカ	3.0
イギリス	2.4

(注) 昭和23年~33年の平均成長率

これは、世界一といわれる日本人の勤勉さ、技術の画期的な進歩その他いろいろな良い条件が重なったことによるものですが、このような高い成長率は、生産性の高い工業、建設業(第二次産業)の伸長と、これに伴う商業、サービス業(第三次産業)の発達によるものであって、漁

業や農林業(第一次産業)はあまり成長しておりません。

しかも、成長率の低い第一次産業に従事する人の数が最も多く、わが国の就業者数の四〇%近くを占めていることは、近代的な国の産業構成ではなく、わが国経済の大きな問題となっており(第二表参照)

産業別就業人口比率の比較(第2表)

区分	日本	アメリカ	西ドイツ
第1次産業	39.6%	12.2%	23.2%
第2次産業	24.2	34.7	42.2
第3次産業	36.2	43.8	32.4
合計	100.0	100.0	100.0

(注) 日本は昭31~33年の平均アメリカ、西ドイツは昭25年

では、なぜ漁業や農林業の第一次産業が、他の産業と同じように伸びないのでしょうか。それは、現在の第一次産業が、規模を拡大し、資本を投下して生産性を高めてゆくことができるという仕組み―構造―になっていないからです。一例をあげますと、漁場の区域を拡げる余地はありませんし、狭い漁場に沢山の漁船がひしめいているのでは、規模を大きくすることもできません。

目次

沿岸漁業の

構造改善について(一)

水産課 生産係 1

漁協婦人部活動状況の概要

5

スルメイカの習性と漁業(一)

水研香住支所

浜部 基次 6

漁業今昔

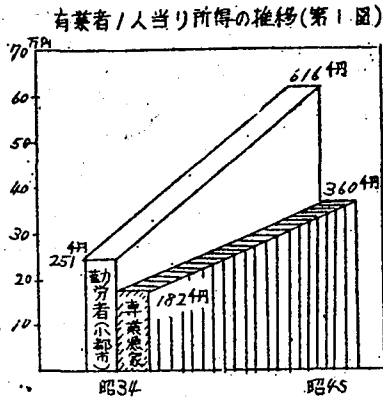
いわしの巻 (17)

平岡安民 11

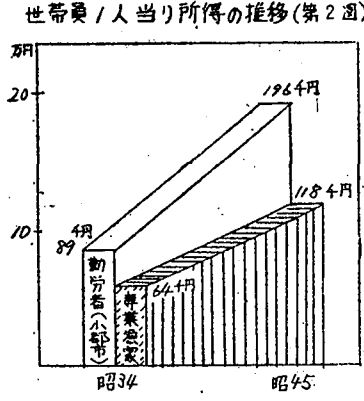
昭和三十六年六月の

海面漁業漁獲量の概要

農林省兵庫統計調査事務所 14



(注) 1. 数字は、いずれも1年間の所得。



2. 小都市とは人口20万人以下の都市

さきほども述べたように、第二次、第三次産業と第一次産業の成長率には大きな差があります。ちょうど特急こだまと各駅停車の普通列車のようなもので、年を追うにつれその開きはますます大きくなり、その開きが、個人の所得の差となり、生活水準の差となってまいります。では、十年後には、この所得の差がどのようになるでしょうか。もちろん、十年後の姿をはっきりと見通

すことはできませんが、いろいろな統計調査資料とか、国の所得倍増計画をもとに推定してみますと、次の図に示すような姿となります。

◎構造改善とはどんなことをするの

これは、その地区の実情によっていろいろとちがいますが、目的は、明かるい、近代的な漁村を建設することにあります。

参考までに、中小都市勤労者の所得と同じ水準に達するのに、どの位の水揚をすればよいかといえますと、一隻二人乗りの漁業専業で年間二八五万円という計算になります。

もちろん、都市と漁村では生活費などの点から多少の差はやむを得ませんが、ただ職業がちがうというだけで、このような大きな差が生じるという事は、沿岸漁業の構造に問題があるとはっきりいえましよう。

そして、他産業に従事する人と同じような所得、生活水準をもつ明かるい近代的な漁村を作るためには、現在の沿岸漁業が、できるだけ高い生産性をあげられるように近代的な仕組みに改善する以外に方法がないわけで、このことを「沿岸漁業の構造改善」とよんでいるわけです。

昭和三十五年十月の農林漁業基本問題調査会の「漁業の基本問題と基本対策」についての答申から主な点をひろって見ますと、兵庫県内海の沿岸漁業の構造改善は、次の二本の大きな柱から成り立っていると考えられます。

一、就業構造の改善
瀬戸内海は、狭い漁場に沢山の漁業者がその生活を依存し、わが国沿岸漁業の縮図といわれております。そして「乏しきを憂えず、均しからざるを憂う」という考え方のもとに、漁業制度上いろいろな制限が設けられていることもご承知のとおりであります。

このような考え方は、わが国経済の成長がゆるやかであった頃はこれで良かったのですが、他の産業がどんどん伸び、さき程もいきましたように、所得なり、生活水準に大きな差を生じてくることになりまして、いつまでもこのままで放っておくことはできません。

では、どうすればよいかということですが、それには、狭い漁場に沢山の漁業者が働いていること―過剰就業―が解決されなければなりません。過剰就業は、沿岸漁業の宿命的なものであるといわれてきましたが

このままでは、沿岸漁業者はいつまでもたっても浮かばれないということになってしまいます。

近年は都市の景気がよく、若い人はひっぱりだこで都市へ出てゆきます。長男でも半数以上が家業の漁業を継がないという地区が沢山あります。(第三図参照)

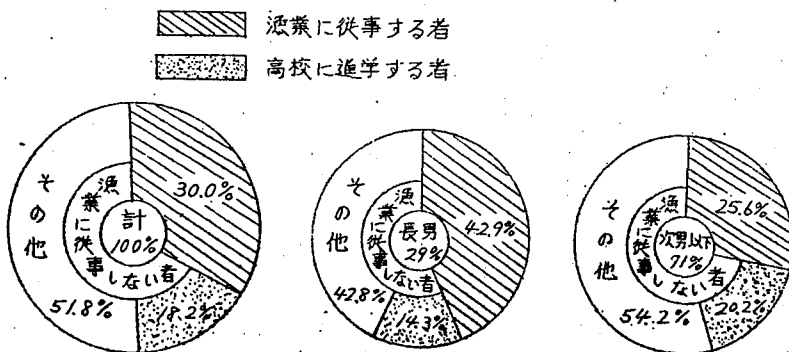
このままでは、沿岸漁業者はいつまでもたっても浮かばれないということになってしまいます。

近年は都市の景気がよく、若い人はひっぱりだこで都市へ出てゆきます。長男でも半数以上が家業の漁業を継がないという地区が沢山あります。(第三図参照)

このままでは、沿岸漁業者はいつまでもたっても浮かばれないということになってしまいます。

近年は都市の景気がよく、若い人はひっぱりだこで都市へ出てゆきます。長男でも半数以上が家業の漁業を継がないという地区が沢山あります。(第三図参照)

漁家の男子中学卒業者の進路調査結果(昭34年度) (第3図)



(注) 鹿の瀬海域集約経営調査による

若い人があまり沢山出ていってしまふとなると、将来の漁村のいない手が非常に少なくなってしまうとい

う問題がありますが、わが国の経済は、第二次、第三次産業を中心として伸びてゆかなければならず、そのためには沢山の人の必要としますから、若い人を無理に漁村にひきとめるわけにもゆかないでしょう。ところが、現在漁業をやっている人が、漁業をやめて陸へ上ることは、陸の人の商売替とちがい、よほどよい条件がない限りできるものではないと思います。何んの準備もなく陸へ上ったのでは、「身についた技術がないので将来性がない」とか、「時間にしばられて息がつまりそうだ」ということで、「陸に上ったカップ」の言葉のとおり、みじめな思いで海に戻ってくることになりかねません。

皆さん方も、最近、職業訓練とか職業指導とかの言葉をよく耳にされると思います。これは、転業したい方々が「陸に上ったカップ」にならないように、技術なり知識を身につけていただくというわけで、県でも、転業のための資金の融資やら、職業訓練とか、転職のご相談合い手になれるような窓口をつくっております。

しかしながら、口でこそ簡単にいえるものの、漁業者の転業問題ほど

難しいことはありません。といって、現在の過剰就業のままでは、いつまでたっても世間並みの生活がでないとする、難かしいからといって放っておくわけにはまいりません。この問題については、皆さん方のご希望なり、ご意見を十分聞かせていただき、県も、市町村のご協力を得てできるだけのことをしてゆきたいと思っております。

二、経営構造の改善

これは一口にいつて「漁場利用関係を改善し、企業的漁業を育成する」ということです。

現在の沿岸漁業は、「零細」というなさない言葉で表現されておりますが、この、その日暮しの商売をいろいろな施策によって企業的な経営に育てあげようということです。

企業的な経営とはどういうものかということ、簡単に申しますと、(一) 家計(生活費)と漁業の経費とが分れていること、つまり、どんなに勘定でないこと。

(二) 他産業に従事する人の所得、生活水準と肩を並べることができるところ。

ということになりました。そして、単に家族労働の小さな規模ではなく、雇傭者の労働力を中心とした

大きな規模になってゆくことが将来の目標であります。

では、このような目標を達成し、又目標に近づくためにはどうすればよいかということになります。これは、漁村の実情によって当然異なることとすし、今後皆さん方のご意見を伺ったり、ご相談をしてみてもいいことになっておりますが、こういうものが考えられているということを書いておきます。

(一) 残海増養殖業、魚類養殖業の推進

これは、単に投石とか魚礁のようなものではなく、大規模な土木事業によって、養殖漁場をつくらうということです。

最近の養殖業の技術は非常に進歩してきており、多くの魚について、卵から大きくすることが研究され、一部では、既に企業化されております。いわゆる「とる漁業からつくる漁業への転換」で、他の漁業に比べて生産性も高く、これから大いに伸びるものと期待されています。もちろん、従来から行なわれている投石や魚礁の設置事業も資源の維持、培養という見地から積極的に実施する必要があります

ますし、高級魚の稚魚放流なども実現したいものです。

(二) 健全な漁家経営の育成

これにはいろいろな対策が考えられます。例えば、協業(共同)経営による生産性の向上、加工、流通関係の改善、漁船、漁具の改良、漁業技術の改良等、皆さん方がいつも考えられ日常の話題なり、問題とされていることです。

従来は、こういう問題をその組合毎に考える場合が多かったのですが、わが国全体の経済が大きく動きつつあり、しかも、わが国経済の中心地に含まれている内海においては、組合地区どころか、いくら区域を拡げても水産のみの範囲内で物を考えることは許されなくなってきたので、できるだけ視野を拡めて問題にとりくむことが大切だと思えます。

以上が構造改善の大きな二つの柱ですが、さらに壁をぬり、屋根をふかなければ完全なものとはいえませんが、例えば、漁船の安全を図り、漁獲物の流通、販売を円滑にし、そして生産性をあげるためには、施設をよく整っ

た漁港を建設しなければなりません。この場合、漁港と名のつくものを全部整備するのではなく、将来漁業の中心地となるところへ重点的に建設されるべきでしょう。現在、こういう見地から漁港の整備計画が検討されておりあります。

また、道路の建設も地区によって非常に必要なところもあるでしょうし、漁村の環境を良くするため、漁民住宅の建設、下水道の整備とか共同炊事、託児所なども考えられます。

このようにいろいろな点から、沿岸漁業が他産業の所得水準と肩を並べ得るように、今後皆さん方と共に検討し、計画をたててゆきたいと思えます。

◎構造改善の進め方

構造改善促進対策事業の進め方については細かい点はまだはっきりしておりませんので、詳しいことは決り次第ご連絡することにして、今月号でははっきりしている点について説明することとどめておきます。

一、基本調査について

はじめに申しましたとおり、本年度は構造改善促進対策事業の計画策定のための調査を行なうこと

になっております。調査の種類は「社会環境調査」と「漁場環境調査」の二つです。

(一) 社会環境調査

この調査は漁村の実態を、漁家一戸ごとに調べて漁家台帳をつくり、今後皆さん方と一緒に計画を定めていく上の基礎資料を作るためのものです。皆さん方も、自分の組合地区で漁業者が何人おり、その家族が何人いるか、また、漁業者なり家族の人がどんな仕事をしているか、というようなことは大体はお判りになると思いますが、数字的に知っておられる方はおそらくないと思います。構造改善のための事業は、ある程度広い地域をもとに考えてゆかねばなりませんので、正確な資料がありませんとまちがった方向になってしまうことにもなりかねませんので非常に大切な調査であり、そのまともった結果は皆さん方にとっても非常に役立つと思えます。

これとよく似た調査は、二年前に鹿の瀬を中心とした「沿岸漁業集約経営調査」で行なっておりますので、その調査地域の

方は、「あー、またあんなうるさいものをやるのか」と思われることと思えます。今度の調査も簡単なものではありませんが集約経営の調査も皆さん方のお蔭で非常に役に立ちましたし、今度の調査をすることによって二年間の漁村の動きがはっきりとわかり、本当に生きた資料になってまいります。

今度の調査は、九月末頃に用紙をおくばりし、大体今年中にとりまとめる予定でおります。

(二) 漁業環境調査

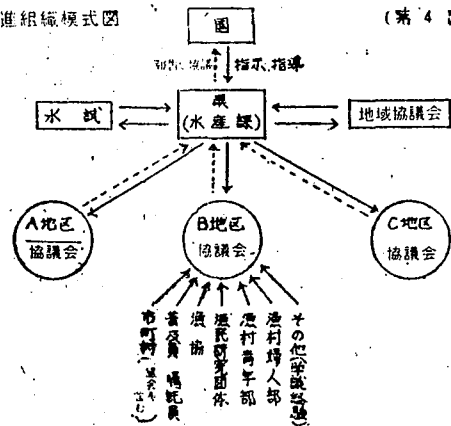
この調査は漁場の実態とか、将来開発可能な漁場とか、現在の漁場をどのようにすれば良くなるか、というように、漁場を中心とした調査です。この調査は主として水産試験場で行なうこととなります。

以上、二つの調査はいづれも構造改善促進対策事業の将来をきめる重要なものであります。県としても、市町村のご援助をお願いして、全力をあげてこれにあたることにしておりますので、皆さん方におかれましても、よろしくご協力下さいようお願いいたします。

二、推進組織について

構造改善のための仕事をすすめるために次のような組織ができることになっております。

推進組織模式図



(一) 地域協議会

この協議会は、内海地域全体の基本的な問題を協議していただくことになっており、市町村、海区委員、業界、学識経験の方々十五名以内で構成される予定です。

(二) 地区協議会

この協議会は、二、三市町村を一地区とし、その地区の具体的な問題を協議していただくことになっております。その構成

スルメイカの習性と漁業(一)

日本海区水産研究所香住支所

農林技官 浜部基次

(1) 話のはじめに

スルメイカは日本海とこれに続いている海洋の対馬暖流の流域内に広く分布し、イカ、タコの類のうちでは各地でもっとも多く漁獲される回遊性のイカで最も重要な種類であります。

このスルメイカを目的とするスルメイカ一本釣漁業は、全国各地で極めて多数の沿岸一本釣漁業者が従事しており、その意味で、日本の沿岸漁業のうちでは重要な漁業であり、沿岸漁業者がこの漁業により生計を立てる依存度も極めて高いものであります。

その証拠には、日本全体の年間における漁獲物の魚種別順位では常に二〜三位と上位を占め、昭和三十四年には四八〇千トンの漁獲量で実に日本第一位を占めております。近年のスルメイカの日本全体の漁獲量をみると、昭和三十年〜三十三

千トン、昭和三十一年〜二九千九千トン、昭和三十二年〜三六千四トン、昭和三十三年〜三五千四トン、昭和三十四年〜四八〇千トンで、第二次世界大戦後に日本で漁獲量が急激に増大したものの一つとして資源の動きが注目されているものであります。

スルメイカとスルメイカ漁業は、このように日本の沿岸漁業で古くから伝統的位置を占めており決して軽視してはならない相手でありますがこの重要さとはうらはらに、どういうわけかスルメイカがどのような習性を持ち、どのように生育し、群を作って移動をし、その間にどのような漁獲されているかというような生態の問題は、あまり、ハッキリ調査されないうままウヤムヤに見過されてきたので、ほとんど何も知られていないといってもいいような状態であります。そこで、昭和二十五年から昭和三十

十六年までの間に

西部日本海の

島根県隠岐島で

スルメイカの調査に

従事したさい、とくにスル

メイカの場合には

水産研究所の活動の

目標である資源の

総量とその動態を把握

してこれを永久に維持管理する

合理的の方策を樹立する

には、どうしてもその以前に

スルメイカが生れてから死ぬまでの

生活の一切を十分に知らなくては

ならないと考え、まず、スルメイカ

の生活習性を明らかにすることを

目標にして研究しました。

スルメイカの生活のうちで、従来

の調査研究の仕事がふりかえってみ

ると、ほとんど交接、産卵、孵化、

稚仔などのことが知られておりませ

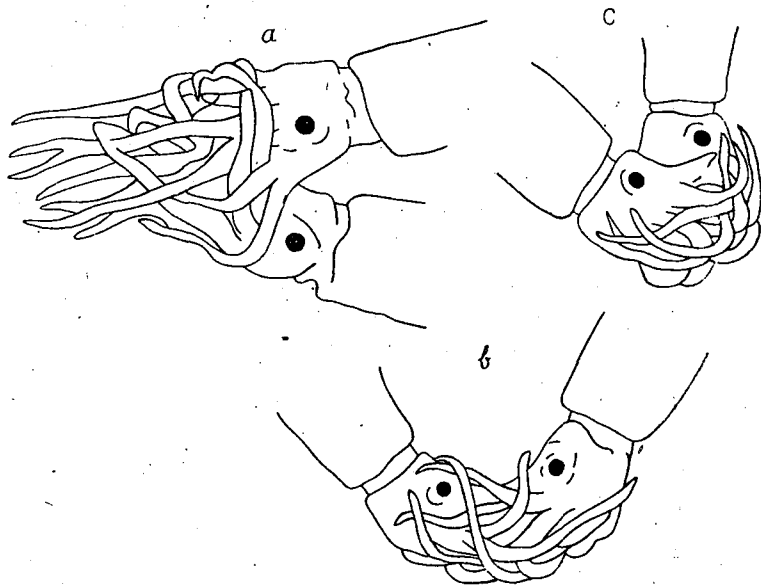
んのので、まず、それらを記述し、最

後にスルメイカの生活や生態習性を

総合してみた場合のスルメイカの漁

業の盛衰についてもふれてみたいと

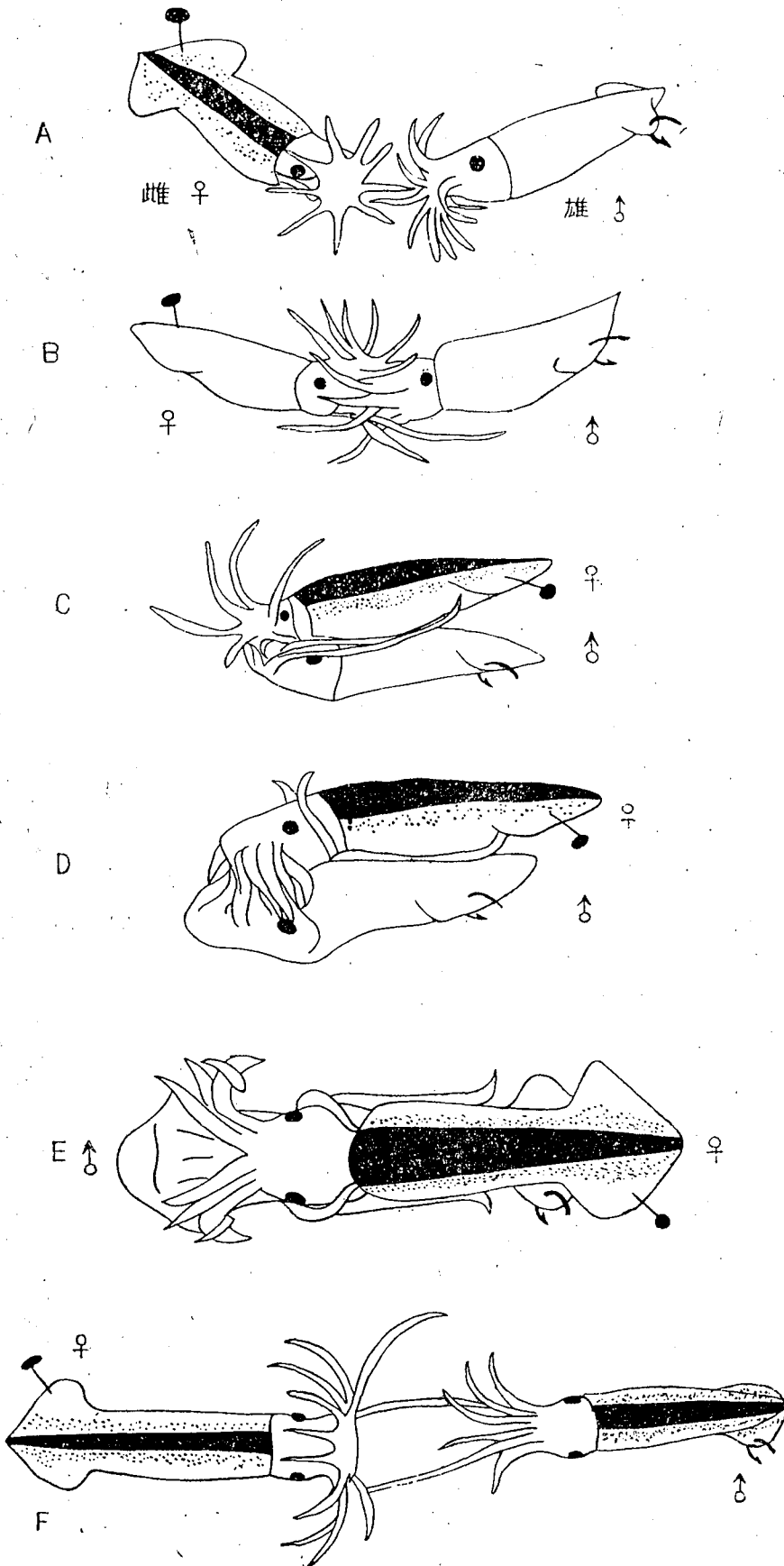
第1図 スルメイカ交接3態



思っております。

ここで、お願いしておきたいことは、沿岸漁業者は自分達の地先でのある漁業の豊凶とが、今年の見込みに強い関心を持たれており、(それはまた当然とは考えますが)よその土地のことを話して貰っても役に立たぬという考えかたをする場合が往々にあります。スルメイカのように南は九州から北は樺太北海道まで大回遊をする生物については、広い眼界をもち、高い視点から、日本海

第2図 スルメイカの交接図



イ (2) スルメイカの習性
 スルメイカの交接は、昭和八年

全体の動向をにらむことが、実は自分の地先の漁況の変化を知るよすがともなるもので、日本全国のスルメイカを追って歩く、スルメイカ一本釣漁船の船頭になった気持で読んでください。

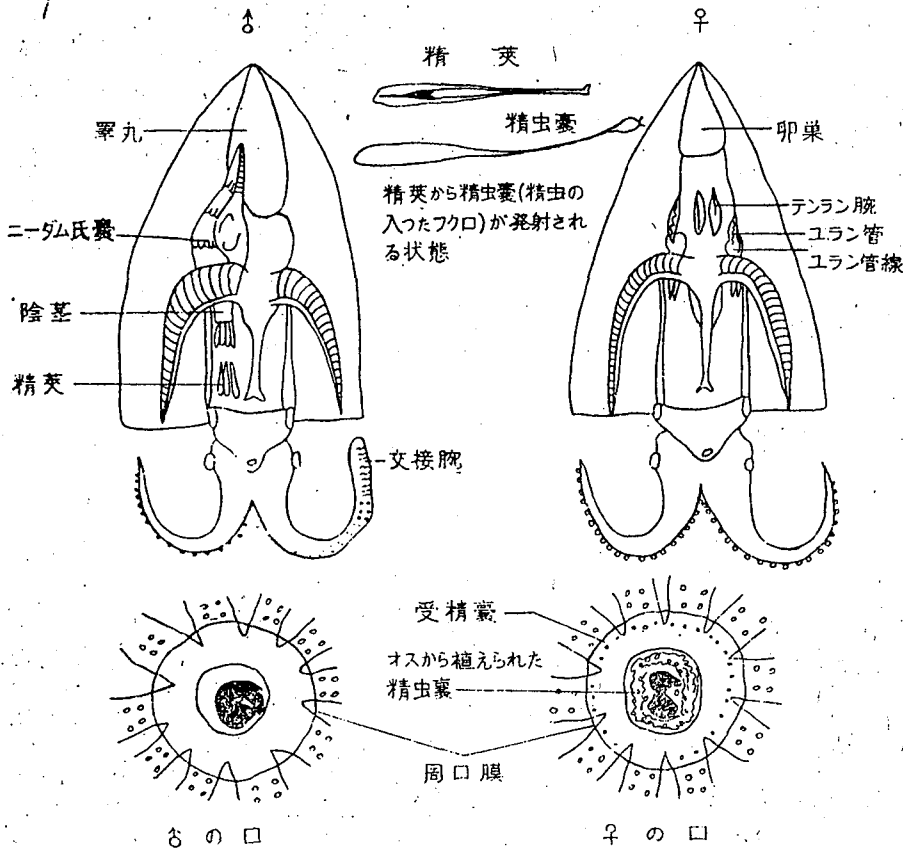
八月に北海道江差で、諫早、川上両氏が、実際に見た例があります。その状態は第一図に示してあります。

この図についてよくしらべると、実は雌雄の別が不明なので雄同志または雌同志が、けんかして絡み合っているのかも判りません。

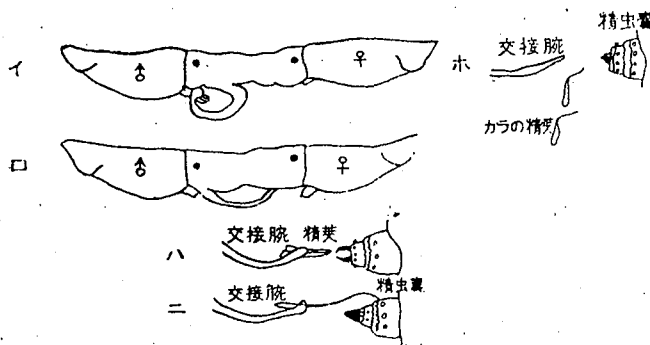
そこで雌雄の別の、はっきりした絡み合いで、しかも、交接したことを証明できる何か特徴をみつける方法はないかと思いついた。スルメイカの一回の交接時間は一〇秒以内ですから六年

間真冬の海上で辛棒して一分間だけ観察したことになります。第二図をみますと、雄と雌の別は、はっきりしていませんので交接だろうということは考えられますが、はたして成熟した一人前のイカが、ほんとうにその気でやっているのかどうかをもうひとつはっきりさせるとさらによいと思われれます。

第3図 成熟した(交接することの出来る)スルメイカの雌雄



第4図 メスの口に 精虫囊が植えつけられる順序 (添田氏 昭和31年の推定)



つまり、交接であるという、動かぬ証拠が欲しいのです。それにはまず、この絡み合ったイカが成熟した一人前(一尾前)のイカであることを、雄、雌それぞれの生殖器官の特徴から明らかにする必要があります。

スルメイカは胴長が20cm以上になってから、性的に成熟するので、よく変っている点、交接と産卵とが相当長い日数をへだてて行なわれるものです。今までに判ったところでは、冬イカといわれる冬季日本海沿岸を南下してくるスルメイ

カの大群は、交接行動が活潑に行なわれている群で、南下が終り交接行動も一段落して、雄が死にはじめてから、雌が単独で初夏までの間に、日本海沿岸を発達してくる対馬暖流ののち産卵回遊の北上を行なうものと判断されます。今成熟したスルメイカの雄と雌を解剖して体内の生殖器官の状態を検査すると第三図のとおりです。

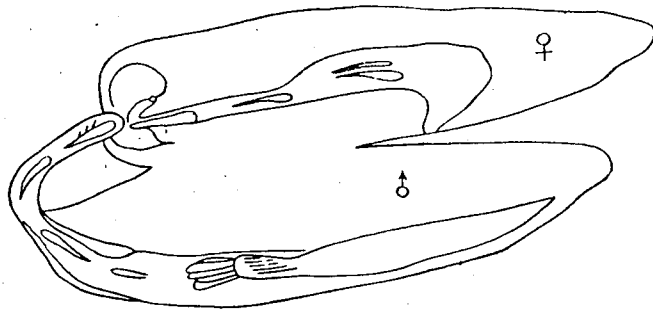
また、精虫囊がメスに植えつけられる順序は、第四図のように推定されております。このようにして交接が行なわれると考えられております。

ところが、私が交接だろうと思っておる六回の絡み合いの雌と雄を解剖して調べてみると、雄の胃内には別段変わったものは入っていませんが、雌の胃にだけ、空の精莢が何十本と呑み込まれており、活簞の中には、空の精莢は一本も落ちていません。

以上のことから、交接のさいには第四図の推定のように精莢が運ばれてから、精虫囊が発射されるのではなく、第五図のように、雄イカから雌イカに向けて精莢が腕を通して運ばれ、精莢が雌の口の中に含まれてから精虫囊が発射されるもののように考えられます。

何故このように、ややこしいことを調べたかという、何十年も前からスルメイカの交接時期と産卵時期の区別になる目安がなく、冬イカの南下群を、ある人は産卵群だといひ、別の

第5図 交接スルメイカの精英輸送法を体断面でみた図



人は交接群だといって議論百出でいづれとも決定しかれていないのですが、交接のときに雌の胃内に交接の証拠が呑み込まれ残っていることを手掛りに、自然海に生活している冬イカの生態行動をみると、雌の過半数から八割前後まで、交接の証明もっており、他のどの時期よりも多いので、冬イカを交接群であると決定することができるので

あります。

以上のことから、冬期のスルメイカが海の表層に大群をなして浮上し、宵市、朝市などといわれる、水中照度変化のさいの激しい群行動をすることは交接にともなう一つの特徴な行動であるとみなすことができる。

冬イカ交接群の交接水温が三〜一八℃で、これはちょうど漁場構成要因の水温(適温)と一致して、イカの釣れる環境といわれてきたものと合致しております。

ロ、スルメイカの産卵

これまでのところ、スルメイカの産卵は、まだ一度も人に見られておりませんが、昭和三十三年から三十六年まで毎年五月〜六月ごろ実験をして一五回の産卵を観察することができました。

スルメイカは直径三〇〜四〇cmの大きさで、ちょうど水爪位の大きな卵塊を海底又は海底の物体に産みつける。その構造は次のとおりである。

a 鶏卵の卵白様の粘りけをもった寒天質の透明卵囊に包

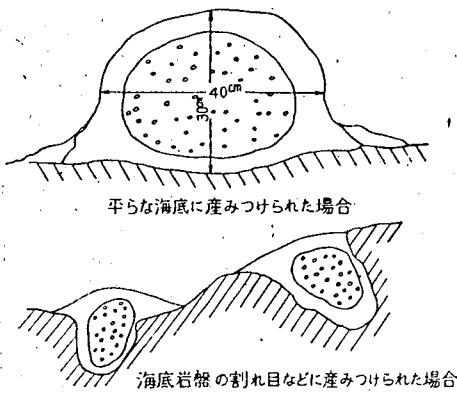
まれている。

b 内部に人間のツバ状の粘りけをもった浮力のある透明寒天質が満たされている。

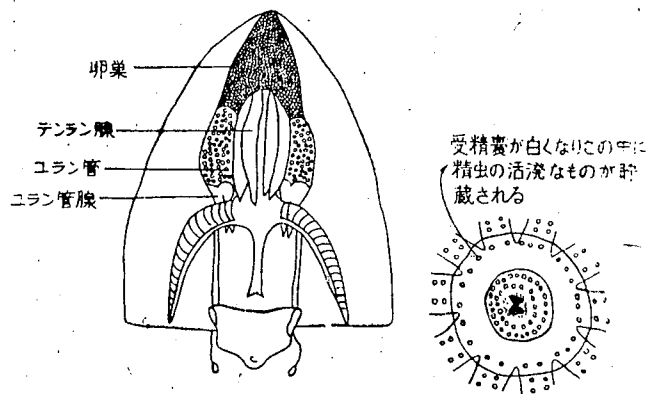
c この内部の物質中に、数千の卵が均等にバラまかれています。この卵塊の形状は海底の岩礁や、いろいろの物体に産みつけられるので、ある一定の形をとるといふことはなく、地形、地

(底)質によって変化すると考えられ、自然状態ではおおよそ次のようであろうと考えられる。(第六図)

第6図 自然状態におけるスルメイカ卵塊の形状推定図



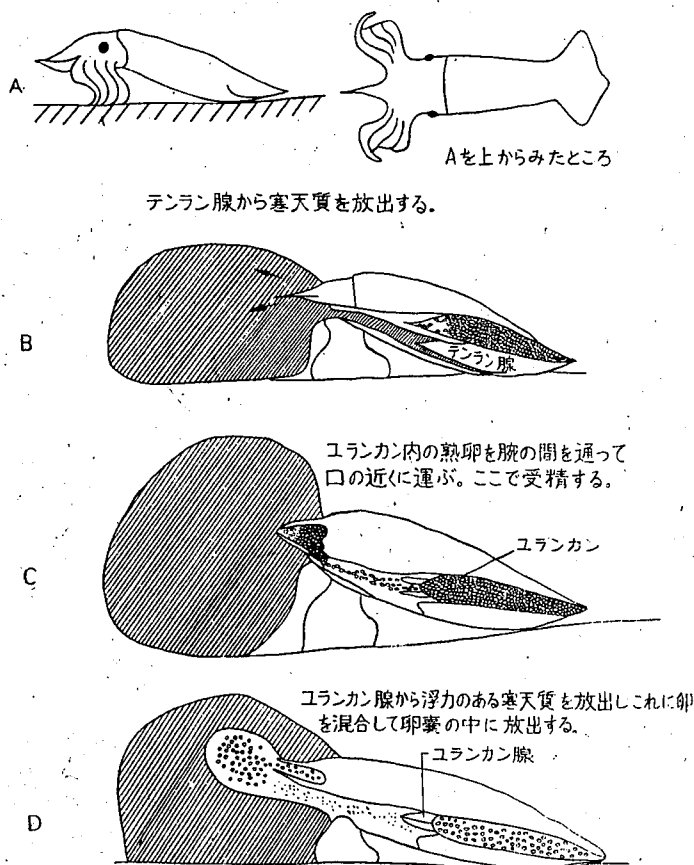
第7図 完熟産卵親イカの解剖図



産卵する親イカの状態はどうかというと、これは完全に成熟したイカで、体内にアメ色に熟した卵が充滿し、そのために胴体が膨れ上った「ハラミイカ」と隠岐地方では俗称されているイカで、ちょうど人間の妊婦さんの「臨月バラ」のような感じのものであります。

「産卵親イカ」を解剖図で示すと第七図のとおりで、これを交接のところを示した、雌の解剖図(第三図)と比較すると、

第8図 スルメイカの産卵の順序



一層よく産卵スルメイカの状態が判ることと思います。それでは、次にこの完熟したハラミイカがどのようにして産卵するかといいますと、それは次のような順序で行なわれます。(第八図)

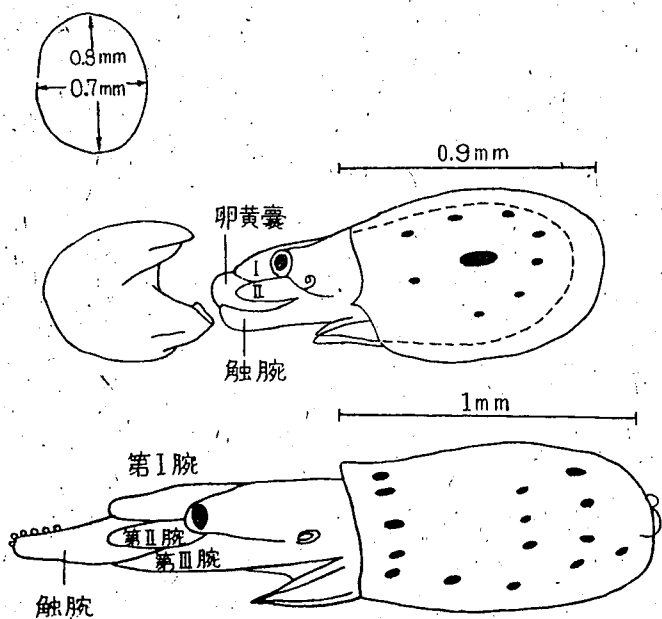
以上で産卵の方法は判ったことと思えます。

スルメイカの産卵は、一回に

二時間以内を要し、産卵場所の水深は五〜二〇mでも行ないましたから、大体完熟親イカとされる水深一〇〇m位までのところの沿岸部では、春から初夏のころ、どこの地先でも産卵するものと考えられます。

また、いわゆるスルメイカの産卵場は、南は九州北西海域では晩冬、西部日本海では早春か

第9図 スルメイカの卵と孵化直後及び孵化後1~2日の幼生の形



ら初夏、能登以北では初夏から夏のころ連続して南方から北方へ移動していくもののように判断されます。

隠岐島近海では、産卵は、水温一五〜二〇°Cの環境で、大体五〜六月ごろに行なわれます。また若い若いイカで新しく生れた「シンコ」もやはりこのような水温に好んで棲息してい

ます。

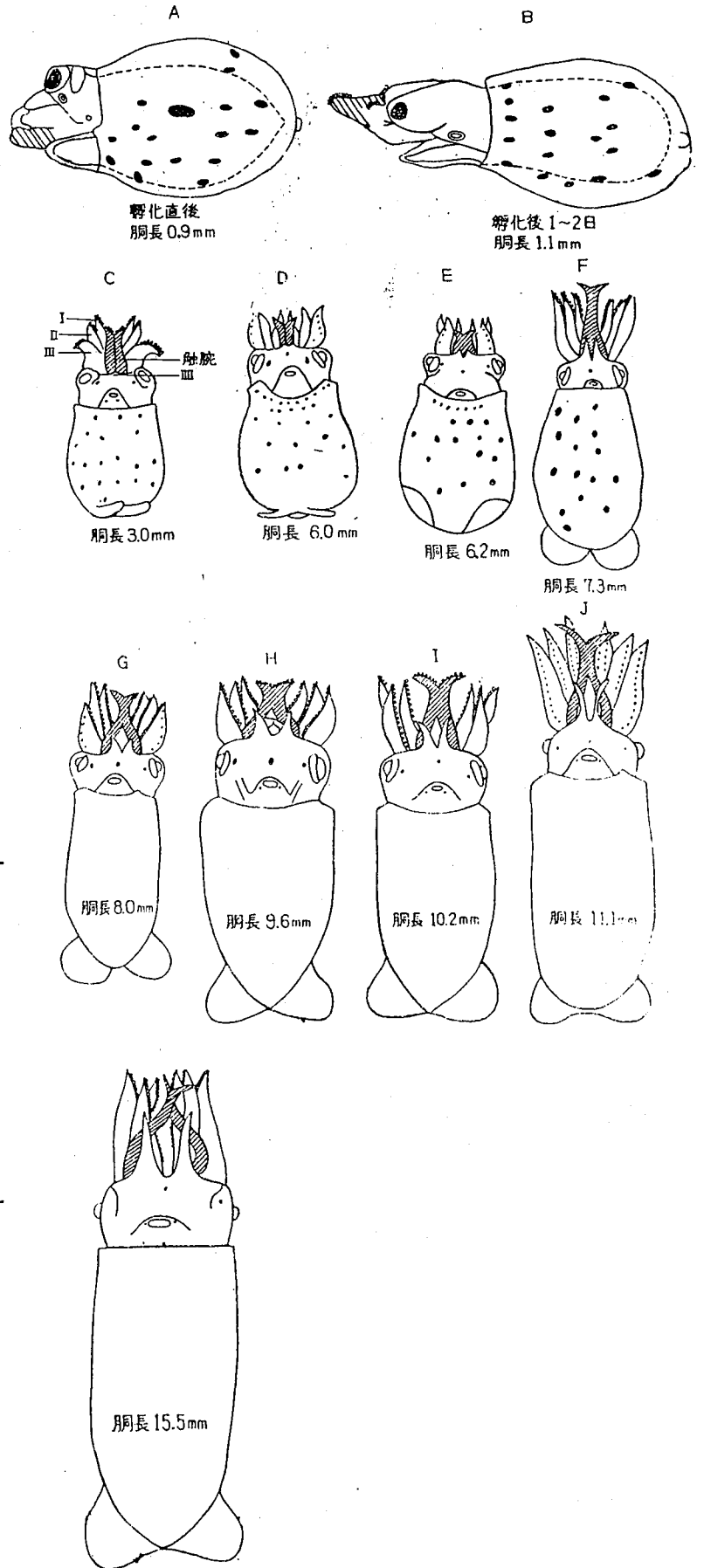
スルメイカの漁場を探す場合には、冬イカでは一〇〜一七°Cの水塊を目安とし、春から夏イカでは一五〜二〇°Cの水塊を目安とすることの根本には、スルメイカ自身が交接、または産卵を目的として群の回遊移動を行なうさいそのような水温の水塊で一番行動しやすく、生理

的狀態がよいものとみなされま

八、卵から孵化するまで

スルメイカの卵は鶏卵を小さくしたような形をしていて、長い方が〇・八mm、短い方が〇・七mmで受精後

第10図 触腕と第Ⅲ腕の生えてくる順序



一八〇二二。Cの水槽水温内では四〇五日で孵化してきます。この卵の形と、孵化してくるときの体形は次のとおりで、孵化直後には第Ⅰ、Ⅱ、触腕の三対六本で、孵化後一、二日ではⅠ、Ⅱ、Ⅲ、触腕の四対八本ができて、最後の第Ⅲ腕二本はおそくなってから生えてきます。

二、触腕と第Ⅲ腕の生えかた

スルメイカの幼生の腕のうち触腕と第Ⅲ腕がいつごろ完全に生えそろうかといえますと、孵化してから約半月位たって、胸長が1cm五割位の大きさになった時で、その順序は第一〇図のとおりです。

漁業今昔

いわしの巻 (17)

平岡安民

第三大漁丸

新生丸の減船整理への加入によって、私は再び浪人となった。かねて

Nさんが、どこかえ売りにみましよう、と聞いていてくれたが、或日釜山市内の下田さんの興安丸への話し

が出来そうだから、という吉報もたらして、一しよに行つて見ようということになった。下田さんは温厚な人格者と聞いていたが、初対面ながら意気が合い直ちに乗船決定となつて、明日からでも仕事の準備に出勤するという事で帰宅した。

するとその夕方に浦項の川瀬さんが訪たてきた。この人はしん大敷や地曳網などを経営していたが、今は事業をやめて迎日漁業K区入り漁労部長をやっている。私はこの人とは深い交渉もなかったが、彼が村瀬さんの顧問のようなことをやっていた為、過去一年間は親しく交わる間柄となつていた。

迎日漁業はしん大敷網が本業であるが副業的にいわし巾着網を三統やっていた。

「村瀬がやめたので、私の方の漁労長に是非お願いしたいと思つて、お伺いしたのです」「それはありがとうございます。しかしお気の毒ですが、下田さんの方へ約束してしまつたので、今日のことなんです。どうすることもできません。」

まだ新米の身で、そう早く売れてしまふとは思わなかつた、といった意外な面持ちで目を丸くしながら、「フーム、そうでしたか、遅かつたですな」川瀬さんは残念そうに溜

息をついていたが、

会社の幹部は二、三の候補を上げているのですが、私はあんたを推して今日になってようやく納得させてすぐやってきたのです。どうですか下田さんの方へは何んとかうまく断つて、心安い我々の方へきて頂けないものでしょうか」

「私もそうできたばと思ひますがNさんが紹介してくれたのですし、断るといふわけにもゆかんです」

「Nさんがね、そうでしたか、では念のためNさんにお逢いになつて向うの了解を得るように話してみたくれませんか、まことに勝手ですがね、私は話の成り行きに希望をつないでおいて一とまず帰りますから」Nさんに報告すると

「下田さんにはまづいけれども、あんなの身になつてみると、一ぱい船主よりも会社の方が仕事もやり易いし、将来のためにも迎日へ行くべきだという判定を私は下しますね」こういつて自分の立場の不利など服中にないように悠々と微笑していった。私はつい、うっかりして

「すみませんが下田さんへもう一度足を運んで下さつて、この話をし下さいませんか」と虫のよいことをいってしまった。するとNさんは

急にきびしい調子で

「そりゃー、あんたが自分で処理すべきことですよ、率直に事情を話して、お断りしますと、そこは折角好意をよせてくれた向うを傷つけぬように婉曲に、しかしはつきりと辞退のあいさつを自分でせねばならんです」下田邸の敷居が高いからとて尻ごみしている自分が恥づかしい。

こうして迎日漁業の第三大漁丸に乗船し、三年ぶりで又もや、浦項の地へ舞いもどつてきた。

しかしこの三号網は漁労長決定がおくれたため、漁夫の雇い入れも他船よりずつと遅くなり粒のそろつた網引き(若者)を集めかねた。川瀬部長は、どう見ても他の二統にくらべて劣つていると、くり返して心配していた。しかし船長をつとめる義兄は慶北水産試験場の漁労長をやつていた腕ききであるし、昨年の漁夫頭(船頭)金ボンギも身内の若者数人をつれていゝ。そこへ私の弟が加わつた。この弟は工業学校を卒業しながら、ちぢむさい工場つとめなど性に合はん、志は大海にありと宣言してやつてきた。海に憑かれた男である。以上の三人のサムライの外に自船のさんま漁夫で子飼いの面々もあるから、漁夫の質なんぞ、てんで私は問題にならぬと信じていた

この頃支那大陸の戦争に、いよいよ抜き差しならぬ泥沼に足を突つ込んだ破目に、日本は追いこまれていた。食糧も燃油も網もロープも次第に枯渇してきた。いわしをしぼつた油から火薬原料のグリセリンを抽出したあとのエステルというのを機関の燃料にし潤滑油には鯨油やふかの肝臓からとつた油が最高級といわれていた。いわしの油を焚いていわしをとるといふ奇妙な、いわし君にはまことに気の毒な仕事をわれわれはやつていた。大の男が一日山の中をうろついて松の枯枝を拾つて、風呂敷包一ぱいを提げて帰る、この原料からとれる油は一合か二合か。これにくらべたら漁獲を上げさえすればかなり謂う所の戦力にもなりそうだ。舷側に水産報国と大書して、まさに陣頭に立つという意気、ごみで沖に出たものである。

この時からさかのぼつて十年前、六月から八月頃にかけて、さば、ふかなどの漁をしていた私は、沿岸から三十哩の所で、昼はハネ魚、夜は白いヒキ魚を毎日のように見ていた。このいわしのヒキの中に大きい型の魚がまじつてゐるのを見て、さばが居るなという判断をしていた。このいわし群は殆んど海を埋めているといつてもよかつた。

そこで今年こそ、他船の操業せぬ沖合へ出て、一と仕事やろうという野心をもって私は、今までのように船主の鼻息をあまりうかがう必要がない立場におかれたように感じていたので、他社の船も自社の僚船もまだ新浦に待機して動かぬ八月の初頃、先頭きって出動し、ウツリヨウ島附近から成北沿海まで五百裡に及ぶ海域をくまなくまわって見た。

ところが予期に反し、一度も魚群に出逢わなかった。あれだけ居たいわし群がどうなったのだろう。一週間わたる自信にみちた行動も全く油のむだ使いに終った。

船が入港して来ると事務所からやってきた社員が船へ合図をして、早く機関をとめろと命令するというくらいにまで、油の一滴は血の一滴と考えられていたのである。このような時に、一船団が一日行動すればドラム缶十本の貴重な油が消えてしまうのであるから、会社の方でもたまりかねて、

「三号網は暴走の傾向あり、漁労長は切に自重せられたし」という戒告を発するにいたった。

そこで出鼻をへし折られた私は、成南西湖津と虎島の沖に薄い魚群が居って夏を越すという事実を知って

いたので、これを目標とした。大部分のいわし群はボセツト湾以北の沿海州へ北上しているのに、ここにもなまけもの部隊があつて、残留して秋の訪れを待っているのである。

この海域へかつてさんま漁にきてみてその事実をたしかめていたから、これをねらって西湖津に陣どつた。

他船は皆新浦でくるべき下り魚群を待っており、時々沖合をまわってみる位で、油の問題もあつて動かなかった。この虎島沖の三、四十米という浅海の泥質の漁場は巾着船にあって世にも恐るべき魔の海であつた。屢々この海で魚群を見つけて投網する船があつたが、例外なく岩網とワイヤが軟泥に食いこんで、無事に旋くことはむづかしく、下手をすると中網をこすり泥に食いとられるという事故が待ちうけているのである。

一度ここへきた船は大なり小なり被害をこうむって退散することになつており、今はもう寄りつく船もなくなつていた。

最初は岩網に塩かますを半分切つた束を所々結びつけてみたが、あまり効果がないので、ゴムあばを結びつけ、岩を軽くし、網の反数も減らして浅海専用の網に改造した。そ

して数日の間に完全な漁具をつくり上げて、薄いなながらも確実に固定した魚群であるから、毎日三〇屯、五〇屯と漁獲を上げていた。

この小漁でも待機中の新浦百余の船団を刺戟したこと一通りでなく忽ち二、三十統がやってきて競って投網する。調子よく二、三十屯をとって氣をよくするのもあれば初めから網をとられて、ほうほうの体で逃げ帰るものもある。結局夕方には大部分がかなりの傷手をこうむって敗退してしまい、翌日になると、もう一隻もやつてこない。

もう我が船の独り舞台で、少しづつ漁獲を上げて行く。四、五日たつと漁のうわきは大きくつたわるものだから、又ぞろ性こりなく十統ばかりやってきて、すべて一日のうちには勝負がついてしまった。

小漁とはいっても毎日堅実に数字を更新して行つたので、かなり他船を引きはなしていた。いよいよ本格的な秋の下り魚を迎へて、意軒昂のわが船である。川瀬部長を心配させた漁夫の素質不良も、一カ月の虎島沖の操業で十分修練を積んだから更に気がかりはないし、何よりも漁夫と幹部の信頼感と、親密感を養うことに成功していたから、もはや業界に名を馳せる一流船も恐るるに足らずという自信を把握することができた。

しかし待ちに待った大群はなかなか下つてこない。もうこの時分は何年か前のように、二裡もつづいた魚群とか、さば漁場に満ちていたいわしとかは殆んど消えてしまつていたのである。工場の機械設備を思わせる装備によつてこそ、かなりの水揚げもできていたけれども、こうまで減少したいわしを根こそぎ取つてしまふような行き方には批判もあり統数を更に減らせるといふ案が総督府なり巾着組合内部に生まれてきた。それにもかかわらず現在やっている網は、突撃的に生産増強をしいられているのである。漁師の頭に資源問題などが浮かんでくる余裕は全くなかつた。私自身も例外ではない。持ち前の懷疑癖も影を消し、会社からコキ使われる身分、漁夫を酷使せねばならぬ立場、そんなことを考えるひまに、軍隊式鉄の統制のもとに事業を運営せねばならんと専ら腐心したものである。

「小さいながらも、われわれ部隊長としては」などという切り口上が大まじめに使われていたのだ。そして、まだまだ自分の腕前に確信をもつ所えは程遠かつたけれども、大徳丸、新生丸の頃のような、卑屈な劣等感、圧迫感に苦しめられることはなくなり、生涯のうちでも比較的愉快に仕事のできた数少ない期間の一つであつた。

六月の総漁獲量は一二、三〇〇トン、 「いかなご」は相変わらず豊漁

農林省兵庫統計調査事務所

昭和三十六年六月の海面漁業による兵庫県の漁獲量は一二、三八九トンで、前年同月より四、一六七トン(五一%)増加した。このうち他府県船による水揚げは二二八トンで、その内訳は京都府船一ト、鳥取県船四八トン、島根県船四四トン、山口県船二五トンで、主に巾着網、敷網、いか釣船が入港水揚げした。

海区別には日本海海区は四、一五六トンで前年同月より七%、瀬戸内海海区は八、二二二トン(摂津海海区一、七六八トン、播磨海海区二、五二二トン、淡路海海区三、九五二トン)で前年同月より八九%とそれぞれ増加した。

日本海海区においては六月から中型機船底曳網が操業禁止期にはいったので「かれい」「たら」「にぎす」等の漁獲はなく、又瀬戸内海海区の漁獲増は前月同様「いかなご」の増獲によるものであった。

増加した主な魚種

「いわし」の漁獲量は一、五七四トンで日本海海区において三二二トン、瀬戸内海海区において一、二六二トン漁獲され、日本海海区では敷網三〇〇トン、巾着網一、二二トンと敷網による漁獲が大部分を占め前年同月の三倍に当るが、過去五カ年平均漁獲量の約半分であった。「あじ」の漁獲量は一、五九二トン(日本海海区一、五〇二トン、瀬戸内海海区九〇トン)で、前年同月より一八%、過去五カ年平均漁獲量の約二倍とそれぞれ増加し、日本海海区においては、いぜんとして巾着網、敷網の主要魚種となっている。「いかなご」は四月、五月にひきつづき豊漁で、前年同月の約四倍、過去五カ年平均漁獲量の三・五倍にあたる五、二二六トンの漁獲量であった。漁業種別漁獲量は「いかなご」は四、八五四トン、「込瀬網」三八一トン、「地曳網」二二トンであるから、六月にはいけば魚体も大きくなり受動的な込瀬網より能動的なばち網の方が漁獲能率がよいことがうかがわれる。「たこ」の漁獲量は四五七トン(日本海海区一ト、瀬戸内海海区四四六トン)で、主漁場たる瀬戸内海海区においては前年同月より二七%、過去五カ年平均漁獲量より一二%それぞれ増加した。漁業別には小型機船底曳網による「たこ」の漁獲は五九二トンで前年同月より一二%減少したが、「たこ釣」は二二二トンの五六%、「たこ壺」は一六三トンで一八%、前年同月よりそれぞれ増加した。そのほか、「かれい」は二〇%、「はも」「あなご」はそれぞれ七五%増加した。

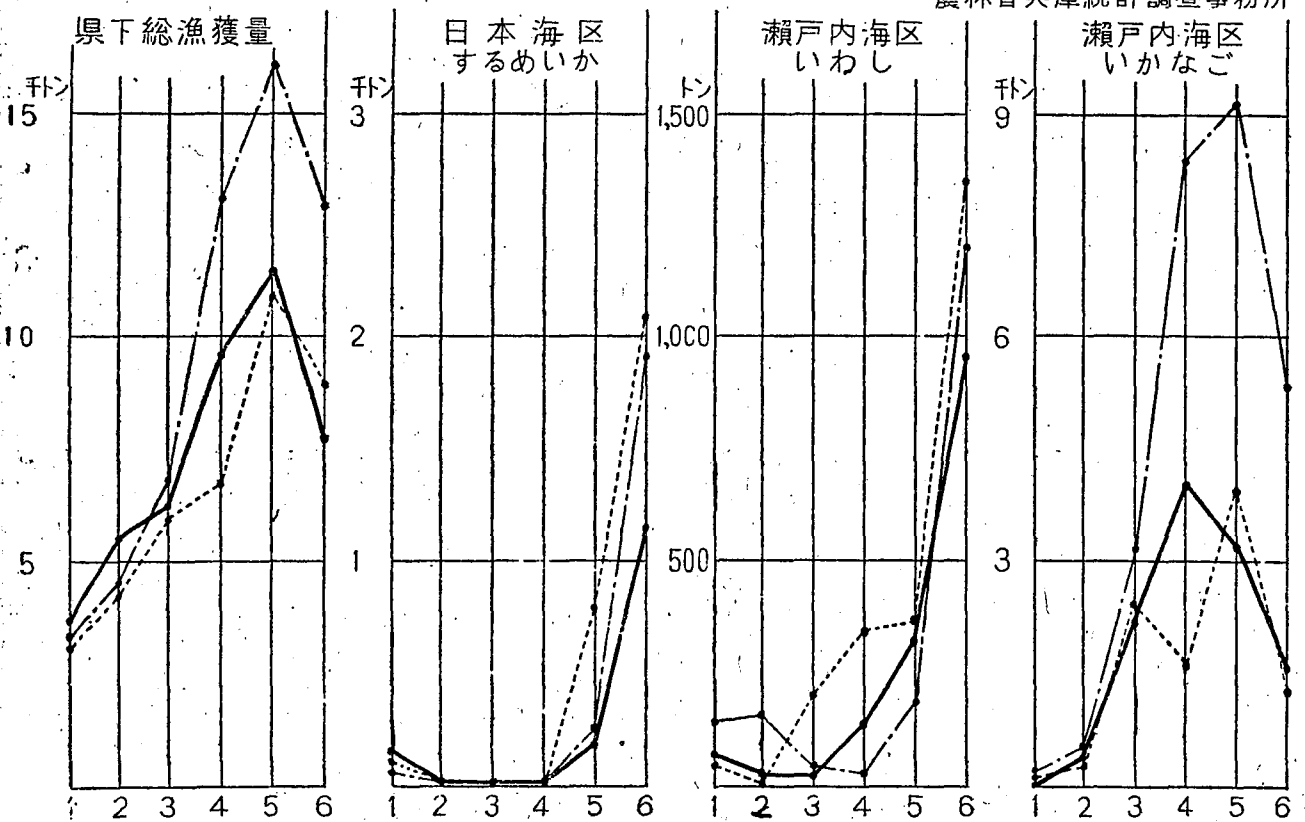
減少した魚種

「まだい」の漁獲量は三七トンで日本海海区においては前年同月の約二・五倍であったが、瀬戸内海海区においては、小型機船曳網、吾智網等による「まだい」の漁獲が減少し、前年同月より三九%、過去五カ年平均漁獲量より四三%それぞれ減少した。「するめいか」の漁獲量は一、九七四トンで、前年同月より六%減少したが、過去五カ年平均漁獲量より五二%増加した。そのほか、「ぶり」七六%、「さわら」五一%、「えそ」五五%、「その他のいか」五〇%、「えび」二四%、「藻類」六〇%とそれぞれ減少した。

本年の月別漁獲量と前年および過去5カ年平均漁獲量との比較

—— 過去5カ年平均
—— 本年
- - - 前年

農林省兵庫統計調査事務所



昭和36年 6月の海面漁業漁獲量 (単位:トン)

海区 年次 魚種	県 総 計				日 本 海 区				瀬 戸 内 海 区				
	36年	35年	増減量	%	36年	35年	増減量	%	36年	35年	増減量	%	
総 数	12,389.2	8,221.5	4,167.7	151	4,156.4	3,870.3	286.1	107	8,232.8	4,351.2	3,881.6	189	
魚	い わ し	1,574.4	1,406.9	167.5	112	312.3	102.6	209.7	304	1,262.1	1,304.3	△ 42.2	97
	あ じ	1,592.1	1,346.8	245.3	118	1,502.2	1,206.5	295.7	125	89.9	140.3	△ 50.4	64
	さ ば	152.3	8.7	143.6	1751	144.9	2.2	142.7	6586	7.4	6.5	0.9	113
	ぶ り	8.9	36.8	△ 27.9	24	8.7	36.8	△ 28.1	24	0.2	—	0.2	—
	ひ ら め い	71.2	59.4	11.8	120	0.3	0.1	0.2	492	70.9	59.3	11.6	120
	と び う お	23.3	32.4	△ 9.1	72	23.3	32.4	△ 9.1	72	—	—	—	—
	え そ	8.0	17.6	△ 9.6	45	—	—	—	—	8.0	17.6	△ 9.6	45
	え い	5.7	7.6	△ 1.9	75	0	0.1	△ 0.1	7	5.7	7.5	△ 1.8	76
	さ め	20.1	16.1	4.0	125	0.1	—	0.1	—	20.0	16.1	3.9	124
	は も	43.0	24.8	18.2	173	—	—	—	—	43.0	24.8	18.2	173
	ま だ い	37.6	50.9	△ 13.3	74	8.9	3.6	5.3	243	28.7	47.3	△ 18.6	61
	さ わ ら	18.1	37.1	△ 19.0	49	—	0	△ 0	—	18.1	37.1	△ 19.0	49
	ぼ ら	21.2	22.3	△ 1.1	95	0	0	0	113	21.2	22.3	△ 1.1	95
	す ず き	13.2	18.2	△ 5.0	73	0.5	0.5	△ 0	99	12.7	17.7	△ 5.0	72
	類	い かな ご	5,236.9	1,232.4	4,004.5	425	—	—	—	—	5,236.9	1,232.4	4,004.5
あ な ご		75.0	42.8	32.2	175	0	—	0	—	75.0	42.8	32.2	175
そ の 他 の 魚		346.0	369.7	△ 23.7	94	37.4	26.9	10.5	139	308.6	342.8	△ 34.2	90
(魚類計)		9,246.9	4,730.4	4,516.5	195	2,038.5	1,411.7	626.8	144	7,208.4	3,318.7	3,889.7	217
水	す る め い か	1,974.6	2,106.9	△ 132.3	94	1,974.6	2,106.9	△ 132.3	94	—	—	—	—
	そ の 他 の か	99.6	198.1	△ 98.5	50	19.0	45.9	△ 26.9	41	80.6	152.2	△ 71.6	53
	た こ	457.6	357.9	99.7	128	11.2	6.9	4.3	163	446.4	351.0	95.4	127
	え び	313.8	411.7	△ 97.9	76	—	—	—	—	313.8	411.7	△ 97.9	76
	か に	5.9	6.6	△ 0.7	89	—	—	—	—	5.9	6.6	△ 0.7	89
	な ま こ	1.3	1.2	0.1	106	—	—	—	—	1.3	1.2	0.1	106
物	そ の 他 の 水 産 動 物 (水産動物計)	2.6	1.5	1.1	176	0.2	—	0.2	—	2.4	1.5	0.9	163
	(水産動物計)	2,855.5	3,083.8	△ 228.3	93	2,005.0	2,159.7	△ 154.7	93	850.5	924.1	△ 73.6	92
貝 類	165.0	106.2	58.8	155	4.8	3.6	1.2	135	160.2	102.6	57.6	156	
藻 類	121.8	301.0	△ 179.2	40	108.1	295.3	△ 187.2	37	13.7	5.7	8.0	240	

(注) △は減 0は漁獲量50kg未満 (50kg以上は100kgに切上げ)